

## 知られざるマアジ

マアジは刺身やフライ、干物などでお馴染みの魚であり、釣りの対象魚としても大人から子供まで楽しめることから、私たちの生活に最も密着した魚と言っても過言ではありません。伊豆地域では、主に定置網、まき網、釣りで漁獲されており、漁獲量が増える春～夏はスーパーや鮮魚店で見かけることも多いかと思えます。

日本周辺で漁獲されるマアジの大部分は、主産卵場とされる東シナ海周辺で生まれ、全国各地に分布しています。伊豆東岸定置網で漁獲されるマアジも、ほとんどが東シナ海で生まれ、初夏頃に稚仔段階で相模湾に補給された群であり、相模湾内で1～2年間成長した後、湾外へ逸散すると考えられています。

しかし、マアジの生態については実のところあまりよくわかっておらず、誤った認識があったり、未解明な部分も多く残されています。その一つがマアジの寿命です。数年前までマアジの寿命は5歳程度と考えられていましたが、近年の調査研究の結果、20歳以上の個体も存在することが明らかになりました。また、10歳以上の個体は若齢魚に比べて生殖腺（卵巣・精巣）が発達しており、生殖能力（産卵数が多い等）が高いという事実も最近になって明らかになりました。伊豆東岸定置網で漁獲されるマアジについて調査したところ、尾又長30cm以上の大型個体の多くが10歳を超えていました。また、生殖腺も良く発達しており、産卵間近と思しき個体も見つかっています。しかし、これら大型個体がどこから来たのか（東北海域から南下回遊してきた？相模湾内に生息していた？）、産まれた稚魚はどこに分布・移動するのか（相模湾内で成長している？）など、分からないことは多々あり、今後も継続した調査研究が必要といえます。

近年、マアジ資源は低調に推移しています。伊豆東岸定置網においてマアジは重要な漁獲対象種であり、漁獲量の減少は定置漁業経営に大きく影響を及ぼすため、少しでも早い資源の回復が望まれます。我が国では水産資源の維持・回復のため資源評価に基づく管理が行われていますが、上述のように生態的に誤った認識や未解明な部分が残されていると、必ずしも実態に即した適切な評価・管理を行うことができないと考えられます。現場では今後も調査研究を継続し、新たな知見を明らかにすることで、より正確な資源評価・管理に繋げられるよう努めたいと思えます。

(鈴木勇己)